

本を読むということ。 読書の薦め

学校長 横山 豊



私の義理の父は、高等学校の日本史の教師をしていました。特に近世の勉強をよくしており、「岐阜県の歴史散歩」という本の執筆者の1人でもありました。とても几帳面な方で、退職後は、毎日の日課が実に見事に決まっていました。早朝に起きて丁寧な庭仕事を終えると、しっかりと時間をかけこだわり抜いて1杯のコーヒーを淹れ、朝食を食べました。そして、時には大音響でクラシックを聴くこともありましたが、ほぼ1日中大好きな本を読んで過ごしました。そして夕方になると、やはり大好きな日本酒で晩酌を楽しみました。このルーティーンが崩れることは、まずありませんでした。

このような義理の父に、私は新婚当時よく晩酌に付き合わされました。ある晩、ほろ酔い加減になった義理の父から、次のような話を聞きました。「豊くん、どうして私が本を読むことがこんなに好きかわかるかね？それは本を読み進めるにつれて、その作者の人生を、自分の人生であったかのように疑似体験できるからだよ。だから、良い本に出会うと、その作家の人生も生きてみた気がする。そのような本に出会った数の分だけ、その人の人生も疑似的に生きられる。面白いとは思わないかね」この話には本当に感心させられました。人は誰しも命が1つ。1人の人間は1つの人生しか生きられない。1度生きたら2度目はないので、1度きりの人生を人は大切にしなければならぬ。多くの人がこのように考えていると、私は思っていました。「本を読むことで、別の人的人生も生きてみる」この発想が実に面白いと思ったのです。

歴史の本を読む時、過去の歴史に学べとよく言われます。確かに歴史の本を読むことで、登場人物が歴史の分岐点において下した決断などから多くのことを学べます。例えば、歴史上の事件が起きた時に、なぜそのようなこ

とが起きてしまったのか原因をしっかりと学び、私たちが未来において似た局面を迎えた時に、失敗を犯さないように対処できるかもしれません。私自身はごく普通の読書好きではあると思いますが、義理の父の話を聞いてから、意識して作者の人生について学ぶつもりで本を読むようになりました。ノンフィクションももちろん面白いですが、フィクションも面白く、またサイエンス・フィクションに至っては、現実にはありえないことも想像上の世界で疑似体験することができるというものです。

毎年、皆勤賞の表彰式の時に話しますが、私はひどい小児喘息のために、小学校2、3年生の時はほとんど学校に通えませんでした。発作が起き、高熱が出た時は、天井から吊るされた氷嚢で頭を冷やし、座敷でほぼ寝たきりでした。その頃の小学校の担任の先生が、ほぼ毎週のように家庭訪問に来てくれ、ある時「エルマーの冒険」という本を買ってきてくれました。私はこの本を読んでは和室の天井の杉板の模様でエルマーの冒険の想像の世界を描き出し、その世界で自由に遊び続けました。装丁がバラバラになるまで繰り返し読みました。そして、病気の発作に耐えていました。私にとってその時の体験は、その後大好きになった「絵を描く」ということにおける想像力が鍛えられ、発想力の源にもなりました。

さて、皆さんはどのような読書体験を持っているのでしょうか？もしもあまり読書習慣のない人は、これからでよいですので、本和館に行き、本を手にとって読んでみませんか。あなたが驚くような2つ目、3つ目の人生に出会えるかもしれませんよ。

